

能登の農業の現状

耕作放棄地はやや減少するも  
担い手不足が深刻に

耕作放棄地面積

	県全体	能登町
平成 17 (2005)	596,197㌥	58,565㌥
平成 22 (2010)	609,420㌥	63,373㌥
平成 27 (2015)	581,699㌥	54,396㌥

農林業センサス (2005,2010,2015)

耕作放棄地は、平成 22 年にいったん増加したものの、10 年前と比較し減少している。

農業従事者数 (販売農家)

	県全体	能登町
平成 17 (2005)	64,424 人	3,304 人
平成 22 (2010)	48,029 人	2,594 人
平成 27 (2015)	33,276 人	1,838 人

農林業センサス (2005,2010,2015)

農業従事者数は 5 年前から 29.1% 減、10 年前からは 44.4% 減少している。

販売農家…経営耕地面積が 30% 以上または農産物販売金額が 50 万円以上の農家

表紙の写真



木を剪定している女性はブルーベリー農家の平さん(→次頁)、シイタケを手に笑顔を見せるのは、シイタケ農家の上野さん(→6頁)と平さんの息子さんです。上野さんと平さんは同級生で、農業経営者として切磋琢磨し合っています。



半島の未来を支える

元気な

能登の農業

平成 23 年 6 月に「世界農業遺産」に認定された「能登の里山里海」。伝統的な農林漁業のあり方が、世界から認められました。

長い歴史を経て育まれた、農業による景観や文化。それら大切な能登の財産を守るためには、農業の継続が最重要課題です。

世界農業遺産認定から 5 年。認定を追い風に、若い農業従事者が商品開発や新技術の導入など、若者らしい新しい視点で農業に関わるようになってきました。その姿を通じて、持続可能な農業のあり方を探ります。

世界農業遺産

国連食糧農業機関 (FAO) が、社会や環境に適応しながら、何世代にもわたり形づくられてきた農業のうち、特に世界的に重要な農業システムを認定する制度。平成 23 年、宝達志水町以北の能登半島の 4 市 5 町が「能登の里山里海」として、新潟県の佐渡と共に認定されました。



農業女子  
×  
ブルーベリー  
栽培

# 女性の視点生かして 商品開発と販路開拓

## ひらみゆき農園



(写真左) 化粧品会社と女性農業者が協力して開発したハンドクリーム  
(右) いしかわの農林漁業まつりで「石川なないろ〜I☆M☆J〜」メンバーとして店頭立つ

ブルーベリー農家の平美由記さん。中斉。ブルーベリー狩りの受け入れや摘み取った実の出荷を行っています。

今年3月、加賀太キウウリやブルーベリーなどを原料に含む口に入れても安心なハンドクリーム「畑の国のアリス」を発売しました。県内の女性農業者グループ「石川なないろ〜I☆M☆J〜」が開発に協力したもので、平さんもこのグループに参加しています。原料のブルーベリーは平さんの畑で収穫されたものです。

「自分たちのニーズを取り入れた商品を作りたい」という女性農業者の意見を受けて、「いしかわ農業総合支援機構」が仲介し、自然派化粧品メーカー「ルバンシユ」と連携した商品開発が始まりました。プロジェクトを進めるうちに農産物を使用する方向性が固まり、ハンド



▲▲ 孫とブルーベリー狩りを楽しむ在りし日の父・原純夫さん。父が遺した農園の恵みが平さんの活動の原動力に



冬を前に、紅葉したブルーベリー畑で枝を剪定する平さん



クリームが完成。全国展開する雑貨店「LOFT」での販売も決まりました。売り上げの一部がルバンシユからグループに寄付され、活動継続につながるなど、全国初の画期的な取り組みです。

平さんがブルーベリーを手掛けるようになったのは、父の農園を引き継いだことが契機です。実父の原純夫さんが平成22年に亡くなり、栗やブルーベリーを栽培していた広大な農園が残されました。農園の存続について迷っていたところ、翌年の収穫期にお客さんから「ブルーベリーを販売して欲しい」という連絡を受けました。

と平さんは奮起。現在にいたります。平さんは中学生をはじめとする4男の母でもあります。「現在は過渡期」と話す平さん。家族の理解があるおかげで活動に注力できていると実感しています。女性グループへの参加で販売を経験できたり、農閑期に販売できる商品が誕生したりと「周囲の環境が助けてくれている」と感謝しています。応援してくれる人のためにも、能登の活性化に向けて力を振り絞ります。



金沢市の直売所「むっつぼし長坂店」で行われたマルシェ。ハンドクリームやブルーベリー、野菜が販売され多くの人が訪れた

## 平美由記さんから 町の農業者へ

ひらみゆき農園は今年、地域の資源による生業創出や里山保全などを支援する県の事業「いしかわ里山振興ファンド」に採択されました。ブルーベリーのピューレやソースなどを作り、地域外から「外貨」を稼ぎたいと考えています。平さんは外とのつながりによって活動の幅を広げました。手応えを感じながらも、もっと能登の農業者がまとまってつなかりを強化し、若手の仲間づくりでより良い商品作りにつなげていきたいと考えています。

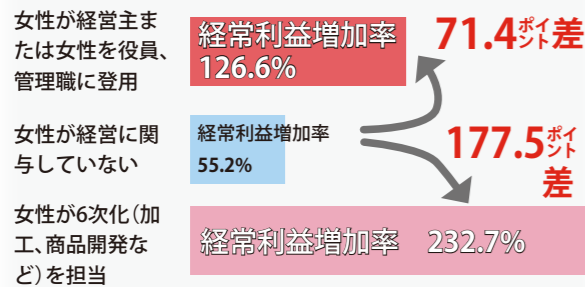


能登の人、風土、作物——能登の暮らしには宝がいっぱい。人の暮らしがあるからこそ守り続けていけるもの。暮らしを守るためには、生業を作る強い商品が必要です。良い商品を作るため、町内の農業者のつながりを強くして、能登の農業を盛り上げましょう！

## 農業の成長には 女性の経営参画が必要！

農林水産省が今年11月にまとめた「農林水産業における女性の活躍推進について」では、「女性役員・管理職がいる経営は、いない経営と比べて、収益力が向上する傾向にある」と分析されています。

### 女性の農業経営への 関与がもたらす収益性向上



(平成28年11月、農林水産省経営局就農・女性課女性活躍推進室「農林水産業における女性の活躍推進について」より抜粋し、加工)

しかし、農林水産省が2014年に実施したアンケートでは「自分自身に経営者としての意識があるか」について聞いたところ、「経営者である」と考えた人は46.5%でした。依然として補助的な立場の人が多くいます。(平成24年度農林水産省「女性の農業への関わり方に関するアンケート調査」)

農村地域が活性化するには、女性が経営に参加し、アイデアを生かせる環境作りを急ぐ必要があります。



新ブランド発信  
×  
業界活性化

# 商品力向上で 組合全体の活性化を図る

農事組合法人のとって



(写真上) 一度に発生した「天恵菇」を収穫する上野さん  
(下) 現在は6棟のハウスでシイタケやキクラゲを栽培している

## 期待のしいたけ 石川天恵菇

**新**品種「石川天恵菇」はうま味が従来の3倍、雑味が10分の1という夢のようなシイタケ。すばらしさを多くの人に知ってもらうため、安定して生産量を増やすことが上野さんの目標です。



寺分の農事組合法人「のこの」代表理事の上野誠治さんは11月上旬、高級シイタケの品種「石川天恵菇」の収穫に追われます。「天恵菇」は徳島県で開発された「なばし天415号」のうち、直径7センチ以上かつ重量70グラム以上という基準を満たすものに許された名称で、昨年から導入された新品種です。肉厚で旨味成分が多く、油を使った料理とも相性がよいなど、画期的な品種です。この品種はキノコの足の部分「石突き」から水分が出て、他のシイタケに影響を与えるため先端を切り落とす必要があります。

要があり、他の品種と比べて手間がかかりますが、愛情かけて手が加えられたシイタケは、高級シイタケとして出荷されます。県内の5つの農家がこの品種の栽培に取り組んでいて、うち3カ所が町内の農家です。

ほだ木を使う高級シイタケ「のとてまり」と収穫時期が異なることから、菌床シイタケ栽培農家の経営の安定化に期待がかかります。導入初年度の昨年は温度管理などが難しく、思ったほどは収穫できなかったのですが、今年は手応えを感じています。

菌床は広葉樹のおがくずや米ぬか、フスマなどを合わせて成形されるものです。ハウス内に棚を作り、菌床を置いてシイタケを育てます。栽培はハウス内で行うため、冷暖房で温度管理が可能です。しかし外気や水温など外的要因は生育に大きな影響を与えます。短期間で一度に発生してしまつたシイタケを収穫しながら、「自然にはかなわない」と上野さんはその難しさを話してくれました。



石川天恵菇の今シーズン初出荷を持木町長に報告し、経営への意気込みを述べた

現在、上野さんが行っている天恵菇の栽培法では、形が良くなく、基準を満たさな

い商品も多く収穫されます。品質がそろつた商品を少数作ることでも、経営的にはこちらが望ましいのですが、当面は地元の人にも味を知ってもらつて、ブランドを浸透させようと考えています。形や大きさが基準に満たないものは「天恵菇家族」という名称で、手軽な値段で販売し、好評を得ています。上野さんは経営の安定化を



図るため今年8月、家内で行つていたシイタケ作りを法人化しました。現在6棟のハウスでシイタケ作りを行っています。近頃はハウスの数を倍増させたいと考えています。法人化はその第一歩です。小さい頃、両親からは「シイタケは一代限り」と言われてきました。「親と同じことをしていたら、親を超えることはできません。事業拡大などのリスクを負わせたくないで、継がせたくないでしようか」と上野さんは思いを巡らせ、他

### 上野誠治さんから 事業の継承について 考えている皆さんへ

家族で農業経営をしている2代目は、事業を現状維持するか拡大するか、いずれにしても、経営の方向性に迷いを抱えています。

農業を任せようとしている人も、継ごうとしている人も、お互い課題を共有して、前進できるように意見交換しましょう。





N-projectのメンバーはゆめうらら(志賀町)の協力を得て、耕作放棄地で酒米を栽培。数馬酒造では麹造りや醸造だけでなく、精米や洗米など最初の工程から体験した



学生の酒造り  
×  
遊休農地  
再活用

## 酒造りを通じて 農業と能登を盛り上げる

### N-プロジェクト

県内に通う学生有志が酒造りを行っています。「N-project」は学生が農業者と酒造会社と連携して酒米づくりから手掛け、オリジナルの日本酒造りの取り組みです。「若者が能登も農業も日本酒も盛り上げる！」と意気込んで活動にあたり、今年で3年目の酒造りシーズンを迎えました。学生が作った酒は「Chikuhana」として世に送り出されました。

酒造りの舞台は宇出津の数馬酒造です。同社の数馬嘉一郎社長は、高校の同級生だった志賀町の株式会社ゆめうららの裏貴大社長とタッグを組み、学生の酒造りをサポートしています。学生は裏さんの水田で酒米を作付けし、収穫にも携わりました。第3期の代表を務めるのは

石川県立大学に通う渡邊瑛勇さんです。農学を専攻している渡邊さん。これまで先輩が築いてきたつながりを大切にしながら、実学として今年の酒造りに携わっています。

「自分たちの手で植えた苗が育っていく過程を見るのはどこか誇らしく、喜ばしいものでした。収穫の際には稲刈りの以外の仕事も手伝わせていただいて、新しい発見の連続でした」と振り返ります。

大学では農業について学んでいますが、実践的な活動が少なく、「石川県の代表的な農業である稲作を知るよい経験となりました」と農作業に手応えを感じています。

寒くなるこれからの季節、学生の酒造りが本格化します。来年度、強い芽が出せるよう、真剣勝負の始まりです。



代表の渡邊さん。イノシシよけ電気柵の設置なども行い、能登の農業が直面する問題を学んだ

麹が出来上がる工程を見学する学生たち



カイゼン  
×  
分散した  
農地の管理

## 「カイゼン」で効率化 能登の農地を元気に

### 内浦アグリサービス

清真にある有限会社内浦アグリサービスでは平成26年からトヨタの「カイゼン」を農業に応用したソフト「豊作計画」を導入し、農地の管理にあたっています。

平成13年に設立された同社では、自社で確保した農地では、稲や野菜を作付けするほか、農家が所有する農地での栽培受託も行っています。その農地は23集落の広範囲におよびます。受託している農家の都合によってスケジュールを合わせる必要もあります。13種類の水稻栽培に加え、牛の飼料用米を乳殺菌発酵によって栄養価を高めた「WCS」を生産しています。シイタケ栽培や畑作など事業拡大に伴って、管理すべき項目はさらに増えています。

瀬川忠さんは、カイゼンを導入することによって農地の効率的な管理が実現することに期待を寄せています。「豊作計画」では、これまででは収穫後など「結果」でしか知ることができなかった収穫の適期が「経過」の段階でわかるようになりました。事前に段取りを行うことで移動時間が削減されるほか、作業の流れを止めず連続して従事できるようになり、業務が効率化しました。余力が確保できるほか、同時進行で作業を進行することで、新品種の導入などが可能になり、「経営にプラスの影響がある」と手応えを感じています。カイゼンの導入から3年目。競争力強化に寄与できるかどうか、導入効果の検証が待たれます。



会社あげて栽培に取り組む、甘みの強い新品種のサツマイモ「紅はるか」。業務の効率化で商品化が実現



丁寧にサツマイモを洗う瀬川さん

### 瀬川忠さんから 能登の農業者へ

能登には農作物を作る上で、すばらしい技術やノウハウが集まっています。奥能登にはこれらの技術を学ぶチャンスが多くあります。技術や農産物を絶やさず、次世代につないでいきましょう。

### 数馬酒造社長 数馬嘉一郎さん から メンバーへ

これを期に「能登・農業・日本酒」に関心を持っていただければと思います。このプロジェクトでの経験が学生の皆さんの将来に役立てば幸いです。



# 就農をお助け 支援制度のご案内



ブルーベリー普及センター職員による栽培指導

## ブルーベリー 植栽費用助成事業

ブルーベリーの苗木植栽にかかる経費の一部を助成します。やなぎたブルーベリー生産組合（年会費3,000円）に加入することが条件となります。

### ■助成内容

- ・苗木補助 1,000円/本
- （植栽本数は20本以上から対象）
- ・資機材補助
- 500円/本（植栽本数20〜49本）
- 1,000円/本（植栽本数50本以上）

## 助成制度

### 農業用ビニール ハウス購入助成

管内のJAで振興している作物を作付けする、ハウスの購入に対する支援を行います。

### ■事業主体

町に本店、支店を置く農業協同組合  
および認定農業者・認定新規就農者

### ■対象作物 園芸作物

※水稻育苗ハウスは除きます。

■補助率および上限額 20割、20万円

## 相談窓口

### 能登町農林水産課

町での農業に関する窓口。各種助成もこちらで相談を受け付けます。

☎(76) 8302

### (公財)いしかわ農業

総合支援機構

就農相談や技術習得、ビジネスサポートなど、農業を元気にするため総合的に支援を行っています。

会員数62人（11月現在）の女性就農者グループ「石川なないろ〜☆MM☆J〜」も機構が窓口となっています。

☎076(225) 7621

<http://www.inz.or.jp/>

食味判定  
×  
米の魅力向上

# 米の食味のこだわり 子どもたちにも伝える

## 能登町おいしいお米づくり研究会



▲真剣な表情で授業に耳を傾ける児童

「三ツ星お米マスター」の福池功さん▶

町内の12の米農家が、町産のブランド米確立を目指すグループ「能登町おいしいお米づくり研究会」を結成しています。研究会では米の味覚を点数化する「食味測定機」を導入しました。米の粘りの元になる「アミロース」やふっくらとした仕上がりに関わる「タンパク」を計測することができ、測定機は町内の米農家であれば誰でも使うことができ、おいしい米作りの参考にすることができ

ます。

研究会のメンバーのうち、米穀店で従事する3人が「三ツ星お米マスター」の認定を受け、米の特長を最大限に生かした商品作り体制を整えました。マスターの一人、福池功さんは建設会社「北能産業」の専務でもあります。同社は平成25年に本格的に農業参入し、食用米や酒米の栽培で耕作放棄地解消にも貢献しています。

研究会では、町内9つの小、中学校の給食に特別栽培米「能登姫」を提供し、三ツ星お米マスターによる出前授業を実施しました。11月14日に松波小6年生の授業では、米を食べた児童から「いつもと違う」という声が上がリ、研究会員の励みになりました。販売ルートや生産量の確保など、今後も課題を解決しながら、ブランド確立に向けて活動を続けます。

### ブランド米の名称決定

10月16日に柳田植物公園で開かれた「秋の味覚市」で開かれた「秋の味覚市」来場者を対象に米の試食会を実施。公募された名称10候補から来場者の投票で最終選考が行われ、ブランド



最終選考会が行われた「秋の味覚市」会場の様子

米の名前が「能登姫」に決まりました。「能登姫」は化学肥料や農薬の使用を半分におさえ、能登牛の糞を使った堆肥を用いる循環型農業で作った米。食味点数80点以上の自信作です。

### 福池功さんから 能登の米農家へ

田園風景も観光インフラの一つ。水生生物や鳥が住みやすい環境を実現し、能登産米にブランド力をつけ、能登の食材とともに提供して、消費者に喜ばれるような農業をしましょう。

## 皆さんから

### 能登の農業者へ

一緒に元気な地域づくりを

町の農業者の取り組みを紹介しました。祭りや景観など、多様な表情を持つ能登の豊かな文化は、農林漁業によって長い時間をかけて作り上げられました。過疎化や高齢化などの問題に直面しながら、その問題を解決し、乗り越えていくと若い力が奮闘を見せています。

日本社会は人口減少をはじめとする問題に直面しています。その波が少しでも早くやってきたのが能登です。日本の危機を乗り越える力が能登にあります。消費者として、あるいは同じ農業者として、能登の農業者の元気と共に、元気な地域を一緒に作り上げましょう。